

interview インタビュー

“女子プロレス界最強の男”といわれ、女子プロレス界をリードする神取氏。同時にLLPW(プロレス団体)の社長として経営に、また若手の指導にも精力的にあたる。神取氏のプロレスラーとしての考え方、そしてプロとはなにか、社会貢献とはなにか、を伺った。大変気さくな人柄で、彼女のファンが多いのも納得である。

(聞き手：石黒清子、坂本正幸)

プロフィール かんどり・しのぶ

1964年、横浜市出身。1983年から連続3年、全日本女子柔道選手権(66kg級)優勝。1984年、女子柔道世界選手権銅メダル。1986年にジャパン女子プロレスにてデビューし、UWA世界女子シングル王者獲得。1992年、新団体LLPWを旗揚げ。1995年、東京スポーツ「女子プロ大賞」を受賞。1998年、WWWA世界シングル王者獲得。また、テレビ等のバラエティ番組にも多数出演したり、福祉活動や執筆など多方面で活躍している。

プロレスラー 神取 忍 さん

—「Mr.女子プロレス」と呼ばれファンから親しまれていますが、この呼び名についてはどう思われますか。

ナンチャン(「ウッチャンナンチャン」の南原清隆氏)がつけた呼び名です。最初は「Mr.」というのは変な感じがしましたが、ファンの方も強い選手という意味でこう呼んでくれますし、今は気に入っています。

—プロレスの世界に入る前は柔道の選手として鳴らし、全日本チャンピオンでもあったわけですが、プロになるといことはどのような意味を持つと考えていますか。

現在、格闘技のプロはアマチュアとの垣根が低くなっています。プロレスのようにほとんど毎日試合をしてもプロですし、数か月に1度の試合をする格闘家でもプロと呼ばれます。しかし、プロとアマとの最も大きな違いは、お金だけではなく、自分の活動を通じて社会に何ができるかを考えなければならないところだと思います。

—具体的に神取さんが考えるプロというのはどういう存在ですか。

試合をきちんとこなすのは当然です。そのための準備であるトレーニングをつらくてもこなすのがプロです。他人から見えないところでどれだけがんばれるかが重要です。そして、プロとしての活動を通して社会に貢献することが重要です。

—その考え方のルーツはどこにあるのでしょうか。

特にプロレスは、見る人に元気を与え、社会に活力を与える役割を担ってきました。日本のプロレスの原点は力道山です。力道山はプロレスを通じて、戦後の日本人に復興へのやる気と活力を与えました。プロレスラーは、ただ、いい試合をしているというのでは足りないと思います。プロレスラーは力道山の原点に戻って、元気のない日本に活力を与えることが大切なのです。



今後、DV被害にあっている人たちに、まず自分から声を上げる勇氣を与えたい。他人が戦えるようにバックアップしていくことが私の課題です。

—他人に元気を与えようと思うようになったプロレス以外の経験があればお話しください。

私は病院や老人ホームで講演をさせていただく機会があります。そのとき、私の話を聞いて握手をすると患者さんやお年寄りが元気になるのですよ、というお話をお医者さんやヘルパーさんから聞いたのです。これはやりがいのあることだと思いました。人のために役立つことはすばらしいと思います。

—参議院選挙に出馬したのもその考え方ですね。

はい。どうすると日本に元気を与えることができるかをずっと考えていましたから、国政の場は私の理想とするプロの活動を実現する場所のひとつであると思ったのです。

—選挙ではDV(ドメスティック・バイオレンス)の根絶も公約にあげていらっしゃいました。何かあったときに、神取さんに来ていただけると心強いのですが(笑)。

手取り早いかもしれませんが、全部私が行くわけにもいかないので(笑)。お話を聞くと、DVの被害者は、自分を責めて我慢してしまっている人が多いようです。まずその人たちに、自分が被害にあっているという声を上げる勇氣を与えられたらいいな、と思っています。ただ、他人が戦えるようにするのは難しいですが、今後、バックアップしていくことが私の課題です。

—他人が戦えるようにする、ということですが、これは団体の若手選手を指導するときも同じですね。

そうです。自分ができてしまうことは当たり前だと思っ込んでいて、意外と指導できないことがあります。スポーツでは、選手として一定のレベルを超えた人は指導が下手という傾向があります。指導方法については、今後よりいっそう勉強を重ねなければなりません。

—若手の選手の練習は厳しいのでしょうか。

厳しい練習に耐えるからプロになれるのです。ただ、最近プロデビューが目標になっていて、デビューしたらやめてしまうという選手が増えました。プロになって何をやるという目標がはっきりしていないのでは

ないでしょうか。何を考えているのか理解できないことがあります。

—若手を指導するときが一番気をつけていることは何ですか。

勝つように指導しているのはもちろんなのですが、本当は負けたときに、選手が自分の力で試合を見つめなおし考えることができるかが重要なのです。私は直接指導をしない場合でも、自分で考えているのかを気にかけて若手を見ています。本当は負ける経験が重要で、そのときにどう乗り越えるかを自力で考えることができるような指導ができるようになりたいと思います。

この意味で、教育現場で負けたらかわいそうといって順番をつけないのは、弱い子供を作ってしまうのではないかと思います。

—最後に、弁護士に対するイメージを聞かせてください。

堅苦しくて何か一言いうと十倍くらい反論されて論破されそうな人かな。そうだけど、いざとなると頼りになる人でもありますね。

—弁護士もフツウのひとつですが(笑)。

プロレスラーのイメージとしても、プロレスラーは怒らせたら殴られそうで怖い。怖いけど、いざというときに強くて頼りになるというものがあります。

怒らせると怖いだろうといわれることはありますね。乱暴者ではないのですが(笑)。そういわれると、一見怖いが頼りになるというのは、弁護士とプロレスラーで共通しているのかもしれませんがね。私たちプロレスラーはぜんぜん怖くないフツウの人間ですよ(笑)。だから銭湯やサウナで一緒になっても、たたかないでください(笑)。痛いですから(笑)。

(構成：坂本 正幸)